
FINAL FANTASY 零式 ~もう一人の0組~

クラウン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FINAL FANTASY 零式 ～もう一人の0組～

【Nコード】

N0150Z

【作者名】

クラウン

【あらすじ】

オリエンスという名の世界――

この世界の均衡が崩れた時、少年達は自らの運命を決める――

Type・0（前書き）

どうも、クラウンです。

こちらは処女作となっておりますので自信がありませんが、暖かい目で見てくださいたら嬉しいです。

さっそくプロローグです。

よろしくお願いいたします。

Type - 0

彼らは、自らの運命を自分達で決めた――

死ぬことを恐れずに――

死に直面する恐怖を知らずに――

鷗歴 842年 水の月。

ペリシティリウム白虎を擁するミリテス皇国は、隣国である朱雀領ルブルムへの侵攻を開始。

宣戦布告と同時に、国境付近に集結させていた主力艦隊をルブルム各地に進め、同時刻、別動隊によるペリシティリウム朱雀への奇襲を敢行した。

その部隊には【ルシ】が含まれていた。

”ルシを用いての国土侵略行為”

それは、オリエンス四ヶ国が定めた【パクスコーデックス】の重大な規約違反であった。

魔導アーマーを主戦力とする皇国軍に対し、ペリシティリウム朱雀は魔法を以てこれに応戦。

そして、その魔法によって呼び出される召喚獣の圧倒的な力は戦艦をも凌駕し、皇国軍の奇襲は水際で止まるかに見えた。

しかし――

白虎ルシ『クンミ』率いる特殊部隊が朱雀の攻撃を掻い潜り、新兵器『クリスタルジャマー』を発動。朱雀クリスタルの完全な無効化に成功する。

魔力の源を絶たれた朱雀軍は戦力の大半を失い、為す術もなく制圧されていった。

皇国元帥シド・オールスタインは、朱雀全軍の武装解除とクリスタルの受け渡しを要求した。

猶予は6時間。要求を飲まなければ皇国軍の殲滅作戦により、朱雀を殲滅すると宣言した。

Type - 0 (後書き)

どうだったでしょうか？

作者は文才に自信がありません。

感想、コメント等お待ちしております。

今後もぜひよろしく願います。

Type - 01 (前書き)

第二話です。

今回はオリ主とオリヒロインを登場させます。

暖かい目で見てください。

Type - 01

「院長、首都奪還作戦開始されます」

朱雀領ルブルム・ペリシティリウム朱雀・魔導院。とある一室。
一人の朱雀兵が、窓際に立つ老人——朱雀第174代院長カリヤ・シバル6世に告げた。

「……彼らに、クリスタルの加護あれ」

カリヤはただ一言、そう呟いた。

ペリシティリウム朱雀・町内の道——現在は皇国軍の攻撃により、辺りは所々火に包まれ、道には朱雀の兵達の亡骸が転がっていた。
そこに一人の朱雀兵が歩いていて。
年齢は17歳ほどの少女で、身体中傷だらけで、右腕に特に深く傷があり、血が垂れていた。

「ぐっ…早く…渡さないと…」

少女は歯を食いしばりながら歩を進めるが、あまりの痛さと疲労が彼女を襲い、倒れてしまった。

そこへ、皇国軍の部隊がやって来た。

「おい！ 朱雀兵だ！ こいつ、まだ息がある」

「構うな。本部からは朱雀兵と遭遇したらすぐに殺せと命令されている。さっさと殺れ」

部隊長らしき兵がそう言うと、部下は銃を構えた。少女は、逃げられないと悟り、死を覚悟した。

しかし、いくら待っても銃声が響くことはなく…

「ぐあっ!!」「ぎゃあーっっ!!」

という皇国兵の悲鳴が代わりに聞こえてきた。

少女は、恐る恐るその目を開けた。

さっきまで立っていた皇国兵は既に死体となって倒れており、代わりに立っていたのは、2本の大きな剣を持ち、朱雀の象徴である”朱い”マントを身に纏った青年だった。

「えっ……? 候補生…?」

少女は驚いていた。彼女は朱雀兵ではあるものの、魔導院にはよく足を運んでおり、候補生の知り合いも何人もいる。だから、魔導院の構成についてもよく知っていた。

そもそも候補生とは、【アギト候補生】と言われ、オリエンスの導き手【アギト】になるためにペリシティリウム朱雀より選ばれた特別な存在である。

そして、その候補生達にもそれぞれ1〜12組まで自分の能力に見合ったクラスに選別され、身に付けるマントの色もクラスによって違ってくる。

しかし、青年が身に付けているマントの色は、どのクラスにも当てはまらず、初めて見るものだった。

「大丈夫か？」

少女が呆けていると、青年が振り返り、彼女に手をさしのべた。

「あつ……は、はい。助けにいただきありがとうございます。……
あなたは、一体……？」

「俺はダイヤ。0組【クラス・ゼロ】だ」

青年は、微笑みながらそう言った。

Type - 01 (後書き)

はい、というわけで第二話でした。

書いたはいいものの、続けられるか心配になってきた……。

オリ主とオリヒロインを登場させました。

このあと彼らはどうなるのか？

次話もよろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0150z/>

FINAL FANTASY 零式 ~もう一人の0組~

2011年11月30日22時47分発行